



古刹の昏りを伝える

浄法寺塗

浄法寺の古漆器と呼ばれた時代の浄法寺漆器。宗悦が語る雰囲気そのままの姿、そしてあでやかさだ

過飾を好まず、質素で丈夫。なおかつ健康な美を持つこと
天台寺の僧侶たちが使った什器にルーツを持つとされる
浄法寺塗の伝統は二戸市浄法寺町で今も健在だ
漆の産地に受け継がれる漆芸美の世界へ旅立とう

民藝の父・柳宗悦が注目した浄法寺塗

「ここに1冊の書物がある。『手仕事の日本』。昭和23年に発行されたこの書はそのタイトル通り、諸国の手仕事が生々しく丁寧で紹介されている。著者は柳宗悦1889年〜1961年。『民藝運動』の父として広く知られる人物である。

宗悦の仕事は日本の風土に受け継がれてきた手仕事、まさにジャパニーズテイラーとも言える美の世界の発見であった。宗悦は風土に思いつく庶民の暮らしを見つめ、そこにある「用の美の世界」をたえず続けた。それがその後、染織家の芹沢敬介、陶芸家のバーナード・リーチら多くの美術家の共感を得て、『民藝』をひとつの思想にまで高めるに至るのである。

諸国の民の暮らしをひびきに観察した宗悦だったが、興味つきない風土、それが東北であった。宗悦は東北を「手仕事の國」と呼び、民藝の理想郷としての姿を見だしていった。

「こつした宗悦の目に留まったのが、浄法

寺塗である。宗悦は「土地の漆を使って塗り上げる浄法寺塗のあり方に着目し、また、そのデザインにおいても、昔の格を守りた柄やひあげと呼ぶ片口の如きもの方に遥かに正しい美しさが輝きます」と褒めた。

さらに、浄法寺塗と同じルーツを持つと言われる八幡平市の荒屋新町の塗り物の絵付けを見て、銀杏だとか桃だとか富士山だとか三四の定まった模様は古くからあり、今も描き続けます。慣れているので筆がよく伸び、絵に勢いがあり、新柄のものに比べて段違いに活々としたところがあります」と記している。

民藝の父の心をとらえた浄法寺塗。そのルーツは奈良時代の728年に開山されたといわれる天台寺にあるとされている。しかも、この地方の漆文化の源流その発掘調査により縄文時代にあるとされている。しかし、いわゆる浄法寺塗と呼ばれるのは、天台寺の僧が什器として作ったものが起源だとこつ。

金箔をあしらった華麗な箔模も存在したが、基本的には簡素な漆絵を施した程



中世みちのくの仏教文化を今に伝える天台寺

度の御山「キ」の名も残されている。御山「キ」は、僧侶が自らの暮らしに用いる椀であっただけに華美を好まず、土地で採られた良質の漆を何度も塗り重ね、質素堅牢に作られていた。

こつした手法がやがては土地の人々に広まり、江戸時代には藩が漆や漆器の生産を奨励したこともあって産業として成長。地元の職人の手で塗り上げられた漆器は周辺の市日で売られたり、盛岡の問屋に納められたりしたほか、「南部塗」と称され、他領にも持ち込まれたという。後になると宗悦が浄法寺や荒屋新町で注目した漆器は、まさにこつした系譜の先で育まれたモノたちなのだ。

土地の人たちに「御山」と呼ばれ、あいつ信仰を集める天台寺。古刹で花開いた漆芸美は、時代の中で変化しながらも、「質素堅牢」とこつした点を守りながら現代に受け継がれているのである。



「手仕事の日本」では浄法寺漆器の「ひあげ」がイラストとともに紹介されている



天台寺には朱漆が施された舞楽面が残る。古い時代の漆文化の華やかさを今に伝える



江戸時代の天台寺。山全体に寺院が点在していた